英泉、広重画「木曽海道六拾九次」の摺刷技法と表現意図について

常包美穂（中山道広重美術館）

渓斎英泉（1791-1848）と歌川広重（1797-1858）による「木曽海道六拾九次」は、起点日本橋と中山道の 69 宿を取り上げた全 70 図(「中津川」の異版を含めると 71 図）からなる大判錦絵揃物である。版元の保永堂（竹内孫八）が企画し、英泉を絵師として天保 6 年（1835）から出版を開始するも、同 7 年以降に作画が広重、版元が錦樹堂（伊勢屋利兵衛）へと引き継がれた。広重による 47 図（「中津川」の異版を含む）は、落款書体の違いにより作画時期の先後を第 1 群 26 図と第 2 群 21 図に区別されている。

本発表は、「木曽海道六拾九次」の摺刷技法に着目し、錦樹堂版におけるぼかし摺の増減と他作品からの版木の転用を指摘する。また、絵師の様式上の特徴と版元の出版業から、本作の完結年を再検討する。以上より、商業主義的な制作環境下における絵師の表現意図と版元の出版意図を考察し、19 世紀の浮世絵出版における本作の位置付けを試みる。

本作の錦樹堂出版図には、摺刷技法における特徴的な試行錯誤が指摘できる。まず、広重第 1 群作画時期に錦樹堂から再版された英泉作品のうち、4 図に山頂へのぼかし摺が追加されている。英泉は描線や陰影によって山頂の険しさを表現する傾向にあり、隆起した地形へのぼかし摺の多用は広重作品の特徴である。本作の英泉作品は錦樹堂版になると落款が削除されるため、本来の絵師が特定しづらい後摺において表現を広重に寄せた可能性が考えられる。さらに特筆すべき点として、第 1 群作画時期における英泉「追分」の後摺と広重「大井」に、同じく錦樹堂より出版された歌川国芳「高祖御一代略図」から「文永八鎌倉霊山ヶ崎雨祈」の雨脚、「佐州塚原雪中」の胡粉の版木を転用していることが指摘できる。

また、第 1 群で平均 5 カ所に施されていたぼかし摺は、第 2 群になると平均 3 カ所へ減少する。色版の枚数や手数を減らすため、摺りを省略した可能性が考えられる。木曽路を象徴する山間の風景や、雨、雪、月といった多彩な自然描写に注力した第 1 群に対して、第 2 群では晴景における宿場の景観情報を平明に表現するようになるなど、広重の作画にも違いが指摘できる。天保末期には広重の画風変化および錦樹堂の出版業縮小が認められることから、現在天保 8〜9 年頃と考えられている第 2 群の作画時期および完結年を引き下げ、天保 11〜12 年頃である可能性を提示する。

天保期における風景画出版の興隆の中で制作された本作は、中山道の各宿場を主題とする唯一の錦絵風景画であり、天保期最大規模の揃物であった。長期的な制作の中で、絵師や版元の交代、構図の変化、ぼかし摺の増減など紆余曲折を経るも、完結まで至ったことには大きな意義があった。本作は、完結後も嘉永元年（1848）以降に錦橋堂（山田屋庄次郎）から再版されており、長きにわたり中山道への需要に応え続けたのである。